

# 金目地区

## ① 金目観音の文化財 国 県 市

MAP D-3

### 光明寺観音堂 県

明応7年(1498)の建立。この観音堂は、本格的密教本堂形式で、外陣の閉鎖性が著しく、内陣は当初後面が三間とも板壁で、低く幅の広い和様仏壇を設けていることなどが特色です。



### 光明寺本堂内厨子 附 木造聖観音立像 国

本尊聖観音菩薩立像を安置する一間厨子です。典型的な禅宗様式で、斗拱も大きく、軒の扇垂木手法も古い要素を伝えています。現在前立となっている附の聖観音立像の胎内銘により、明応7年(1498)の造立と考えられています。

### 金目観音堂二王門 市

昭和62年に行った解体修理の際、斗拱部分から元禄11年(1698)修理の墨書が発見され、元禄期に修理されたことが判明しました。その際、部材の一部に元禄期より古い物があることがわかり、その形態から室町末期(16世紀中頃)のものとして推定されました。



### 木造金剛力士立像 県

両像は、頭頂から立脚の足柄までを樺の一木で彫出し、背面を内割りし、そこに後頭部・背部・腰部の各材で蓋をした形で、遊脚等が別材となっています。

昨形像左脚内割面に墨書銘があり、14世紀頃の造立と推定されました。逞しい肉身部の刻出や腰部衣皺の表現は巧みで、関東における中世金剛力士像(二王像)の佳作です。

### 木造聖観音菩薩立像 市

金目観音堂の本尊で、60年に一度、寅年に開帳されます。本像は藤原期(12世紀頃)の観音像にしばしば見受けられる地方作の素朴な作風の像で、その構造は、頭部と膝部の材質が異なる寄木造りです。

台座は後補ですが、明応2年(1493)の修理銘と110余名もの名が書かれ、広範な階層の人々の護持があったことを示す貴重な史料です。

### 木造観音三十三応現身立像 市

観音経(法華経普門品)によれば、観世音菩薩は教えを説く相手や場所に応じ三十三身の姿に変化するといひ、それを三十三応身と呼びます。本寺の像は、簡潔かつ素朴な作風で、衣や甲冑の彫りは浅めです。相好は全体に穏和で、抑えた動きが特徴的です。造立は室町時代初期と推測されます。童女身像の底部に明応7年(1498)の彩色銘がありますが、造立時の銘ではなく、修理時のものと考えられます。

### 銅鐘 県

総体にやや小振りの鐘で、龍頭は扁平なつくりで、鑄上りのよい造形的にも整った鐘であり、南北朝鐘の特徴をよくあらわしています。現在、観音堂内陣に保管されています。

### 光明寺古文書 市

光明寺に伝わる古文書は十通ですが、南北朝時代にまとまって残っている点と内容に一貫した筋をたどることができる点で、貴重な史料です。

### 光明寺縁起書 市

宝永7年(1710)、浜松城主松平豊後守宗俊の臣・田副太右衛門尉秀典が筆記奉納した卷子本で、金目観音堂光明寺伝としてまとまっている唯一のもので、珍しい史料です。

## ② 旧金目村役場(金目観音奉賛会館)跡

MAP D-3

昭和9年(1934)、この地に金目村役場が建設されました。その後、昭和32年(1957)10月の平塚市と金目村との合併により、この建物は金目出張所や幼稚園として使用されました。その後、昭和42年(1967)、金目観音奉賛会に払い下げられ、金目観音奉賛会館として利用されていましたが、昭和62年(1987)12月末をもって取り壊されました。

## ③ 河身改修耕地整理竣工記念碑

MAP D-3

金目川は川筋が曲がりくねり流れが急であったことや、川底が周囲より高い「天井川」であったことにより、度重なる水害をもたらしました。慶長13年(1608)以降、記録が残っているだけでも、洪水の被害は40回とも言われます。そのため、堤防の築堤や川の筋替え工事が何度も行われています。

この碑は、明治43年(1910)と翌年の洪水により大きな被害を受けた金目村の村民が、河身改修とそれを契機とした耕地整理の竣工を記念して大正10年に建立しました。事業は明治45年に着手、大正7年に竣工しました。



## ④ 金目川大堤

MAP D-3

この地は金目川が屈曲しているため、大雨が降ると堤が切れ、たびたび洪水の被害に見舞われました。慶長13年(1608)の洪水では、家の梁まで水につかるほどの被害を受けました。こうした農家の苦しみを鷹狩りに訪れていた徳川家康が聞き、翌年、堤の改修を命じました。このことから、この堤は御所様堤とも呼ばれています。



## ⑤ 三郡公立学校発祥の地

MAP D-3

明治19年(1886)宗信寺本堂を仮校舎に大住・洵綾・足柄上郡の三郡公立学校は誕生しました。学科は英、漢、数の3教科で、特に英語教育に力が注がれた3年制の学校でした。

明治26年、金目小学校の旧校舎に移り、35年には農業科を新設し中郡農業学校と改称、明治42年には現在の蓮上ヶ丘の地に県立移管して平塚農業高等学校となりました。廃校となった中郡農業学校の校舎は明治42年4月、私立育英学校が開校し、その後奈珂中学校を経て現在の秦野高等学校となりました。



## ⑥ 私立中郡盲人学校の創設者 秋山博

MAP D-4

秋山博は、文久3年(1863)矢崎村(現在の平塚市岡崎)に生まれました。幼い時に失明し、南金目の鍼医・与野竹次郎に弟子入りして明治16年には20歳の若さで南金目に鍼灸院を開業しました。秋山の鍼は、その技術や人柄の高さから全国的にも有名になり、金目の旅館は治療を受ける人でいっぱいになりました。

明治42年、鍼灸業が免許制になり、これをきっかけに翌年、秋山博を発起人にして「私立中郡盲人学校」が設立されました。盲人学校はその後、昭和25年から追分の地に「神奈川県立平塚盲学校」として現在に至っています。大正7年3月22日永眠(享年54歳)、いま寂静寺に墓所があります。



## ⑦ 出羽三山供養塔

MAP D-4

南金目の寂静寺脇にあるチムセ坂を登り切って千須谷に入ったところの道端に、出羽三山供養塔があります。

出羽三山とは、山形県の月山、湯殿山、羽黒山のことで、江戸時代後期に大干ばつが起きた際、千須谷村から3人の代表者を三山参りに送りました。御神水でぬらした手拭いを持ち帰ると、村では雨が降り始め、御利益に感謝した村人が建てたのがこの供養塔です。



## ⑧ 善福寺の木造阿弥陀如来立像 市

MAP E-4

善福寺の本尊で、『新編相模國風土記稿』に「紙ぎき如来」と称すとも記されています。

上品下生の来迎印を結ぶ像で、螺髪は木心に銅線を巻き付けて作られているほか、像底部に設けた2つの穴に丸柄を入れ、それを台座の柄穴に差し込んで像を固定するように作られています。こうした作り方は、口を開いて歯をのぞかせる「歯吹き阿弥陀」と呼ばれる阿弥陀像によく用いられ、本像も「歯吹き阿弥陀」として制作されたものと考えられます。

鎌倉時代後半も早い頃の制作と推定され、「歯吹き阿弥陀」系の中では、古い時期の作品として貴重な存在といえます。



## ⑨ 五領ヶ台貝塚 国

MAP E-4

縄文時代、現在の平塚市域は大きく海が入り込んでいて、およそ5,000年前に広川の台地に貝塚ができました。ここからは貝類や獣骨類のほか、縄文時代中期初頭の土器が発見され、「五領ヶ台土器」として考古学上の貴重な資料となっています。昭和47年に国指定史跡となり、大切に保存されています。



## ⑩ 北金目神社本殿 市

MAP D-3

旧北金目村の鎮守で、県下では数少ない春日造の本殿です。江戸時代前期(17世紀中～後期)の建立と考えられ、平塚市内の神社建築では最も古いものです。

本殿は全面が彩色され、虹梁・長押・上部小壁などに輪宝や写実的な草花等の文様が描かれますが、彫刻による装飾はあまりみられません。木鼻も向拝柱側面以外はすべて絵様木鼻で、総体的に簡素な造りとなっています。また、象の木鼻も下半には絵様木鼻の名残をとどめており、過渡的な形態を示すものとして注目されます。

春日造であってもその平面は、当地方の一間社流造に多い平面構成であり、地方的特色をもつ春日造の遺構としても貴重です。



# 岡崎地区

## ① 駒形神社の棟札・勧化札 市

MAP E-1

駒形神社は丸島村の鎮守で、江戸時代には駒形権現社といい、さらに古くは和田宮とも称しました。

この駒形神社には、古い棟札や勧化札が11枚伝えられています。棟札は、建物の棟上げや修理の際に、建物の名・建造や修理の年月日・建築主・工匠・工事の由緒などを木札や銅板に記して棟や梁に打ち付けたものです。また、勧化とは寺社の建立・修理に際して寄付を募ることをいい、この寄付金や人名を記したものを勧化札といひます。



○年記不明「祐蔵坊賢永(天文六年歿)」筆記名の棟札

○永禄十一年(1568)卯月十八日銘棟札

○天正十七年(1589)卯月八日銘棟札

○寛文十二年(1672)二月銘棟札

○宝永二年(1705)八月銘棟札

○宝永二年八月銘寄進札

○天保十二年(1841)十一月銘棟札

○天保十二年十一月廿八日銘勧化札

○安政三年(1856)六月銘棟札

○明治三十一年(1898)四月銘棟札

○明治三十三年(1900)四月十五日銘棟札

## ② 岡崎四郎義実

MAP F-2

岡崎義実は、三浦地方を本拠とする一族である三浦義継の四男で、中村宗平の娘を妻とし、岡崎郷を開発して岡崎氏を名乗りました。息子に真田与一義忠(石橋山合戦で戦死)と土屋次郎義清(土屋三郎宗遠の養子)がいます。

治承4年(1180)、源頼朝が平家討伐の兵を挙げると頼朝方に属しました。石橋山合戦で敗れ真鶴より海路安房国へ逃れたときは、常に頼朝と行動を共にしました。以後頼朝の側近にいて、奥州藤原攻めにつき従い、2度の頼朝上洛にも供奉しています。

鎌倉幕府では特に要職に就くこともなく、建久4年(1193)には出家し、正治2年(1200)6月21日、89歳で没しました。

